高知学園大学・高知学園短期大学紀要　第54号（2024）：29－36

原著論文

「聖霊降臨祭の婚礼」試論――変容を促す時間――

太田　直也[1]*

要約：フィリップ・ラーキン（Philip Larkin, 1922-1985）は，1964年に詩集『聖霊降臨祭の婚礼』（*The Whitsun Weddings*）を上梓した。その表題作は表面上の平明さにもかかわらず，実際には「孤立」，「結婚」，「社会」というテーマが絡み合った難解な詩である。とりわけ最終連後半の４行は，唐突に現れる「矢のにわか雨（‘an arrow-shower’）」と「雨（‘rain’）」が曖昧であるが，批評家たちは十分な解釈をしてこなかった。それは精密な読みが不要であるからではなく，作品の主題をとらえきれていなかったからではないだろうか。本稿は，この詩の主題が変容を促す「時間」であることを確認し，最終連の「矢のにわか雨」と「雨」が持つ複合的な意味を明らかにする一つの読みを提示した。

キーワード：イングランド，社会，変容，時間

はじめに

「聖霊降臨祭の婚礼」（‘The Whitsun Weddings”）は自伝的な詩で，ある年の聖霊降臨祭[1]の土曜日にハルからロンドンに向かう列車に乗り込んだ詩人フィリップ･ラーキンが目にしたもの――景色，新婚カップル，駅のホームにいる人々――を描いている。基本的には詩人に見えたままの光景が歌われており，声高に自己の思いを吐露するようなことはない。平明な詩行を重ねる中に，醒めた視線による分析めいたものが織り込まれているだけである。

この詩には「孤立」，「結婚」，「社会」という，主題となりうると思われる事柄が内包されており，多くの批評家たちはそれぞれの事柄について語りつつ，「結婚」を論の中心に据えてきた[2]。しかし，実際にはそれら３つは密接に繋がりあっており，主題である「時間」を歌うための「材料」なのである。換言するならば，この詩は「聖霊降臨祭の婚礼について」ではなく，「聖霊降臨祭の婚礼から思われること」というものである。

「孤立」，「結婚」，「社会」という複雑に絡み合うテーマを「材料」として用いて，ラーキンは「時間」という大きな主題について歌っているにもかかわらず，われわれは詩のタイトルに意識を捉われ，誤読してきたとは言えないまでも，ラーキンの意図するところの表層だけを読んできたのではないだろうか。それゆえ最終連の唐突とも思われる４行の意味を明確にすることができなかったのではないだろうか。[3]

本稿においては，「聖霊降臨祭の婚礼」におけるラーキンの意識と作品の主題が「時間」であることを確認し，最終連の４行の意味を明らかにしたい。

I

この詩のテーマにかかわる「孤立」，「結婚」を

[1]高知学園大学　管理栄養学科　*Email: noota@kochi-gu.ac.jp

――いずれも「社会」と関連させて――簡潔に確認しておきたい。

まず,「孤立」について見てみよう。この作品を通じて強調されているのは, 例えば, 地方都市（ハル）/首都（ロンドン）, 明/暗といった, 事物の対照・対立関係である。そして,「私」が他の乗客と対照的な存在であることは, 作品の冒頭から示されている。「私」は自らの周辺で起こっていることにはまったく無頓着で, ひたすら読書を続けるのである。途中の停車駅の騒ぎすらもポーターの声と思い込む。

At first, I didn't notice what a noise
The weddings made
Each station that we stopped at: sun destroys
The interest of what's happening in the shade,
And down the long cool platforms whoops and skirls
I took for porters larking with the mails,
And went on reading. (ll.21-27)

'larking'は詩人自らの苗字を意識した言葉遊びであろうが, 幾分かの滑稽さを含む周囲の状況に詩人が気づいたことを示している。彼は, 一人で列車に乗り読書を続ける自分が「部外者」であることを知るのである。実際, ラーキンは独身であり, ここには独身/既婚の対照・対立が歌われていると言えるが, 列車内外の結婚式に関係した喧噪の中で, 彼だけが孤立しているように見える。

しかし, 例えばハルとロンドンの様子が違うことや, 彼が新婚カップルとは対照的であるということを示したところで, そこに何か意味があるだろうか。たしかにラーキンは独身を貫いたが, 大学の図書館員として働くことで経済的基盤を整え, ジャズの評論を書き, 詩人としても高く評価されていた彼が, 女性蔑視的な発言を繰り返してきた彼が, そして皮肉屋の彼が, 自分と新婚カップルとの差異や「隔絶」を確認したところで意味はないのではあるまいか。そもそも確認する必要などあるだろうか。彼の意識は別なところに向けられているのである。すなわち, 制度上, あるいは表面上, 対照・対立関係にありながら, 孤立に関して言えば, 実際には, 彼だけではなく新婚カップルも孤立している――少なくとも, 孤立に向かっている――ということである。彼らは結婚により他者や社会との絆を結んでいるように見えるが, 実際にはそうではない。それは, 単にハネムーンに出かけることで, 結婚を祝ってくれた見送りの人々と切り離されてゆくからということではない。次の詩行は彼らの孤立を明確にしている。

……none
Thought of the others they would never meet
Or how their lives would all contain this hour. (ll.66-68)

新婚カップルは誰一人として他者のことを考えていない。彼らは結婚して婚姻関係を結んだ相手やその血縁者たちとの繋がりを持つことにより, 皮肉にも他者への意識を失い, 社会の中で自ら孤立するのである。後述するように, 変容の中にある人間にとっての絆が不変ではないということを考慮すれば, 当然のことながら, 婚姻関係に破綻をきたすこともありうることであり, やがて結婚した相手やその血縁者も'the others'となり, 孤立を深めてゆくことになることもあると言えよう。それは, この列車に乗り込んできたすべての新婚カップルに当てはまる。しかも, 彼らはそのことを自覚していないのである。彼らが誰一人「考えていない」のに対し, 詩人については'I thought'を含む詩行がある。これは詩人と新婚カップルをはじめとする他者の対照・対立関係を示しているのであるが, 意識しようとしまいと, 誰もが社会の中での孤立は避けられないということをも示している。

この列車とその周辺をひとつの社会ととらえるならば, 列車に乗っていることで, 意図せず結婚

の儀式にかかわっている詩人は，社会の中で孤立している存在ということができる。しかし，彼を孤立させているかに見える新婚カップルも，彼と同じ目的地に向かっている。彼と共に社会を形成しているカップルも，等しく孤立した存在なのである。そして，作品中でラーキンが次第に‘I’を‘we’に変えていくことから，彼の意識が社会における自らの孤立そのものよりも，あらゆる人々の孤立を生じさせる社会，さらにはその変容に向けられていることが明確にされてゆく。それについては，先の引用個所にある‘sun destroys / The interest of what's happening in the shade’にも表わされている。つまり，われわれは自らが存在している社会とそこに見られる諸現象に意識を捉われているが，見えない所（もしくは見ようとしない所）では変容が起こっているというのである。この２行は作品の１つのキーとなるものであるが，ラーキンは‘I thought of London spread out in the sun’（l. 69）とも言う。彼らが向かってゆくロンドンこそが変容した社会の最たるものであり，そこではさらに次の変容が起こっているということが暗示されているのである。「不変なものは変化のみ」という，文化のひとつの本質を語っているかにも見えるが，ラーキンの脳裏にある変容は現在の変容した姿だけではなく，繰り返される変容という現象でもあるということになるであろう。

Ⅱ

では，「結婚」についてはどうであろう。変容について見てきたことを念頭に置いて確認してみよう。ハネムーンに出かけるカップルを見送りに来る人々の姿を描く時，その視線は幾分かの嘲りを含む皮肉なものであるが，ラーキンは冷静に観察をする。この詩に記されている見送りの人々は，いずれも絆を結ぶ厳かな伝統的儀式に相応しくない服装，言動，行動を特徴としている。二つの連にわたって記述されている人々の様子をまとめよう。

とりわけ女性たちの身なりに関しては低俗さと軽薄さが強調されている。それは‘parodies of fashion, heels and veils’（l.29）から始まり，‘the perms, / The nylon gloves and jewellery-substitutes, / The lemons, mauves, and olive-ochres that / Marked off the girls unreally from the rest.’（ll.38-41）と続けられている。安っぽい見せかけの，伝統儀式には場違いとも言える彼女たちの身なりを詩人は強調しているわけであるが，これは彼女たちだけに対する冷笑ではなく，彼女たちに見せかけの身なりをさせる結婚式というものに対する嘲りでもある。孤立を生じさせる社会変容を考慮すれば，ここには結婚・結婚式が本来の在りようを失って「パロディー」や「模造品」となってしまったという含意が認められるであろう。父親たちの身なりは，結婚・結婚式の変容をさらに示している。彼らは上着のボタンを留めず（留めることもできず）太いベルトが見えており，その粗放さが描かれているが，彼らに関しては‘fathers had never known / Success so huge and wholly farcical’（ll. 50-51）という詩行もあり，子供たちの結婚が「喜び」というよりも「成功」であり，「見せかけ」であることが示される。女性たちや父親たちの身なりが示すように，結婚そのものがすでに神聖な意味を持つものではなくなり，今や形式的なものに過ぎないということになるのである。すなわち，「孤立」についてと同様に，「結婚」に関しても社会の変容が歌われているということになる。

社会の変容に伴い，儀式も以前と比較すると軽薄なものとなったことを述べた後，「叔父」の叫ぶ卑猥な言葉（l. 38）を契機に，ラーキンの関心は，結婚と性を結びつける人々の意識に向けられる。

> The women shared
> The secret like a happy funeral;
> While girls, gripping their handbags tighter,
> stared
> At a religious wounding. （ll. 52-55）

女性たちが分かち合う「秘密」とは何であろう。これに関しては二つの読みが可能であり，それら

はいずれも正当なものと言える。新婚カップルが知らない「秘密」である以上，一つは結婚生活についてのものであるということになる。結婚の儀式における誓詞に触れたばかりの新婚カップルは，死を迎えるまで続く幸福な結婚生活を漫然と想像しているかもしれないが，既に見たように，変容を冷静に捉えているラーキンを考えれば，永続性のない幸福が語られていることになる。つまり，女性たちが分かち合うのは，結婚生活が必ずしも幸福を維持したまま進むものではないという「秘密」であり，この日の幸福な儀式は終わりの始まりであり，葬儀にも等しいものということである。

もう一つは若い女性たちの様子から，性に関わる事柄である。先の叔父のかけ声と‘a religious wounding’に示されているように，彼女たちがハンドバッグをきつく握るのは，この日の夜に花嫁に起こることを想像してのことである。既にそれを自ら体験してきた女性たちが分かち合う「秘密」にこのことが含まれていることは明らかであろう。人々の頭にあるのは，厳かな儀式により神や人々と絆を結び，豊かな社会を形成し，生を全うするということではなく，下世話な想像なのである。「花嫁が傷つくこと」が宗教で認められているとしている点から，ラーキンが宗教と結婚そのものを肯定的に見ていないということはわかるが，少なくとも第二次大戦以前のイングランドでは，結婚に関わる場であからさまに性的なものが他者の耳目に触れるようなことはなかっただろう。しかし，詩人は花嫁にまで‘*I nearly died*’(l. 62)と言わせている。花嫁のこの言葉は曖昧であるが，複数の意味が考えられる。表面的な意味は，１）儀式で疲れて死にそうだった，２）叔父が馬鹿げたことを言い，それが可笑しくて死にそうだった，３）叔父のあからさまに性的な発言が恥ずかしくて死にそうだった，というものである。しかし，ここには暗に性行為がほのめかされており，挙式直後の花嫁の言葉としては，少なくとも第二次大戦前であれば極めて不適切なものである。その言葉を言わせているラーキンが見ているものは，社会とそれを形成している人々の変容なのである。

ただ，ラーキンが歌う父親たちと母親たちの姿には，変容以外のものも読み取ることができる。‘The fathers with…… / …… seamy foreheads; mothers loud and fat’(ll. 36-37)という２行は何気ないものに見える。しかし，彼らもかつては新婚であったこと，父親の額には年月を経て皺が刻まれていること，さらには母親たちもかつては「ハンドバッグをきつく握りしめる若い女性」であったことを考えれば，彼らの変容だけではなく，その変容を促すものを連想することになる。言うまでもなく，それは時間である。実際，ラーキンはこの詩の中で，景色の変化を表すにあたって，さりげなく時間の経過を示している。列車がヨークシャーを出た直後には，彼は‘short-shadowed cattle’(l. 14)を目にしており，太陽の位置が高いことを表しているが，ロンドンに近づくと，車窓から見える景色は‘poplars cast / Long shadows over major roads’(ll. 58-59)へと変化し，太陽の位置は低くなっている。当然，太陽の動きは時間の流れを表しているが，ここでは太陽の動きによって影の長さ（景色）に変化がもたらされていることに意味がある。この作品においてラーキンは孤立や結婚を歌ってはいるが，実は主題として扱っているのは変容であり，さらに正確に言うならば，その変容を促すものとしての時間であるということが言えるのである。

Ⅲ

ここまで確認してきたラーキンの意識とこの作品の主題に基づけば，最終連で唐突に歌われているかに見える曖昧な４行の意味は極めて明解になる。

There [London] we were aimed. And as we
　　raced across
　Bright knots of rail
Past standing Pullmans, walls of

blackened moss
Came close, and it was nearly done, this frail
Travelling coincidence; and what it held
Stood ready to be loosed with all the power
That being changed can give. We slowed again,
And as the tightened brakes took hold, there swelled
A sense of falling, like an arrow-shower
Sent out of sight, somewhere becoming rain. (ll. 71-80)

車窓から見える景色と，多くの新婚カップルを乗せた客車内部の様子を詩人が眺めている間に，列車は目的地のロンドンに近づきスピードを緩める。ここでラーキンは突然，‘arrow-shower’，‘rain’を持ち出す。実際，目的地に向かって真っすぐに進む列車は，外から見れば「矢」のように見えるであろうし，ロンドンに到着した後，乗客たちは客車から「矢」のように飛び出し，「にわか雨」のように次の目的地に向かうであろう。しかし，それだけのためにラーキンは‘arrow-shower’を持ち出したのであろうか。また，‘rain’は何を表しているのだろう。この詩の最後の４行の唐突さと曖昧さは否めない。実際には，主題と最終連に至るまでの流れを考慮すれば，読み取れるものではあるが，この２語にはここまでに歌われてきた事柄がまとめられており，この平明な詩としては複雑なイメージの重層化が行われているのである。

この２語が包含するイメージは，１）神話に関わるものと，２）性的なものとに大別することができる。

結婚と‘arrow’で最初に想起されるのはキューピッドの矢であろう。神話を使って表現するならば，新婚カップルたちの結婚，彼らと社会との「結婚」，彼らと詩人との「結婚」を可能にしたのはキューピッドの矢であると読むことはできるかもしれない。このイメージに沿って考えれば，‘rain’は「豊穣の雨」である。すなわち，新婚カップルの間に心的・物質的な豊かさや子供をもたらす雨であり，社会に多様性と繁栄をもたらす雨である。前の連との繋がりや‘swelled’(l.78)や‘A sense of falling’(l.79)も念頭に置けば，２語とも男性器の連想が可能である。ただ，このように，雨を豊穣につながるものと考えると，では恋人に会うためだけに上京する詩人にとっての豊穣は何かという疑問が生じる。ラーキンは社会で孤立した存在であるが，上に見たように新婚カップルも孤立しているし，雨は誰に対しても等しく降るので，詩人にとっても何らかの豊穣をもたらすものでなければならないからである。これに関しては他の作品との比較検討が必要となるが，少なくともこの詩においては，未婚であっても社会の構成員として自由に生きることのできる多様性に富んだ社会ということになるのだろう。彼と恋人との関係の深化も考えられるが，『北航船』（*The North Ship*）における諸作品を見ると，ラーキンは自らの恋愛にも懐疑的な目を向けており，発展的関係深化を想像しているとは思われない。[4]

豊かさのみを意識した「肯定的な」読みが従来の多くの読みであり，それゆえに繁栄と幸福につながる結婚がこの作品の最大の主題と扱われてきた。しかし，「皮肉な目」で社会を見る詩人は，変容し多様性を有す社会を豊穣とのみ捉えて詩に歌いこむだろうか。むしろ，既に確認したように，‘arrow- shower’にせよ‘rain’にせよ，肯定的な意味を含めつつも，極めて否定的な意味合いで捉えていると考えるべきではないだろうか。先の花嫁の言葉（‘*I nearly died*’）に性的興奮が暗示されているが，この詩もここからがクライマックスであり，ラーキンの言葉の「裏側」，すなわち否定的な含意が一層大きな意味を持つのである。

実はこの否定的な含意は，最終連の曖昧な詩行，‘what it held / Stood ready to be loosed with all the power / That being changed can give.’から，非常に強く示されている。

まず，‘what it held’は人間を指しているとす

ることも可能である。この世に生を享けて以来，時間に育まれた文化，あるいは伝統の中で幼児から大人へと変化した人々が――上に見た母親の変容ぶりを想起すれば容易に理解できるが，この詩の中で人間は変化するものということが強調されている――文化や伝統に「抑圧されて」きた人々が，列車の動きに示されている時の流れとともに，その変化の力を得てこれまで内に溜め込んできた力を解放するというものである。詩の流れを考慮すれば，当然，性的欲求を「抑圧してきた」の含意も認められる。

だが，‘it’を時間と解釈するならば，「変化するもの」としての時間（時間は常に流れているので）が育んできた文化や伝統，さらには人間に内在し充填されてきた，常に「変化するもの」としての時間本来の力を解き放つということになるだろう。つまり，育みもするが変容（時には破壊）ももたらすという，時間の持つ「皮肉な」性質の，とりわけネガティヴな側面が強調されているのである。これまで見てきたような，醒めた視線を持つラーキン「らしさ」ということになるだろう。

さて，‘arrow-shower’であるが，キューピッドが一度に多くの矢を放つことがないことを考えれば，この「矢」は，神話で言えば，戦いの神であるマルスの矢と読む方が妥当であろう。そして，‘rain’は争いごと，終結，破滅，涙を連想させる語となるだろう。これは時間の経過に伴う変容を強調するラーキンの視点にも合致する。つまり，結婚はすべてがうまくゆくわけではなく，時の経過とともに，どこかで争いが起こり，結婚生活は終わりを迎え（fallingには，「落下の感覚」や性的興奮が鎮まることのみならず，この意味も含まれているだろう），涙を流す者が現れると読めるのである。では，この場合，ラーキン自身にとってのネガティブな意味は何であろう。一つは，変容する社会に強制的に組み込まれ，予期せぬ争いごとを眼にせざるを得ない（時には関わらざるを得ない）ことであろう。さらに，希望を持つこともなく，そのようなことを予期せざるを得ない，自らの置かれた世界であろう。それはまさに，変容に組み込まれ，ただ時間に支配されている人間と社会を冷ややかに眺める詩人に相応しい態度と言うことができる。

おわりに

「聖霊降臨祭の婚礼」の主題を確認し，最終連の曖昧な表現の意味を考察した。

この詩においてラーキンが言っていることは，対立する諸物の融合というような，明るく肯定的なことではない。むしろ，彼は極めて否定的な意識を提示している。作品中に強い宗教心や愛を示す語は一つも用いられていない。そうではなく，否定的な語を多用し，古い社会の見えない所で新しいものが胎動しており，そうして出来上がった社会の中でもさらに新しい動きが起きていることを述べているのである。つまり，変化のみが不変なことであり，過去の豊かさも現在の幸福もやがて形を変えてしまうということを，時間を意識しつつ語っているということになる。

この詩は明らかに1950年代のイングランドの戦後社会と人々の変容を念頭に置いたものであり，その時代，社会，人々の中に存在する諸々の対照・対立物を挙げながら，ラーキンはいずれにも肯定的な態度をとらず，一貫して否定の視線で事物を見ている。この詩の主題は「時間」であり，時を止めることはできず，それゆえ変容を止めることもできないということである。人間の意志を超えた時の働きを思い，彼はひたすら否定的に物事を考える。否定し続けることが，より良い世界の創造へとつながるという強い肯定があるのか否かは明確ではないが。

いずれにしても，ラーキンの否定的で皮肉な視線は，既に冒頭の詩行に示され，作品の基調を定めている。彼は自らの乗り込んだ列車を‘my three-quarters-empty train’（l. 4）と言う。なぜ‘a quarter full train’ではないのであろうか。彼にとって世界と人間は，変容し続けることを余儀なくされた，変容を否定しつつ，それでも時間に支配され続ける‘empty’な存在だったのかもしれない。

この作品は，形式的にも内容的にも，イングランドの風刺詩の伝統を踏襲したものと言えそうであるが，その点に関しては稿を改めたい。

注

1．キリストの復活後50日目に聖霊が使徒の上に降臨したことを記念する日。
2．ガイドブック的文献にまで，この詩の主題が「結婚」あるいは「結婚式のパーティー」であると明記されており，自明のことと考えられているかに思われる。Cf. Roger Day, *Larkin, Open Guides to Literature*（Milton Keynes: Open University Press, 1987）, p. 50.
3．実際この４行を詳細に論じた論考は極めて少ない。
4．例えば“One man walking a deserted platform”や“Love, we must part now: do not let it be”が挙げられる。See *Collected Poems*, pp.27, 29.

テキスト

Philip Larkin, *Philip Larkin: Collected Poems*, edited and with an introduction by Anthony Thwaite（New York: Farrar, Straus and Giroux, 1983）

参考文献

Day, Roger, *Larkin, Open Guides to Literature* (Milton Keynes: Open University Press, 1987)

Motion, Andrew, *Philip Larkin: A Writer's Life* (London: Faber & Faber, 1993)

Tandon, B. G., *Philip Larkin: A Critical View of Selected Poems* (New Delhi: Spectrum Books Ltd., 2006).

受付日：令和５年10月17日
受理日：令和６年１月19日

Bulletin of Kochi Gakuen University / Kochi Gakuen College, No. 54(2024) pp.29-36

Original Paper

A Note on Philip Larkin's "The Whitsun Weddings" : Transfigurative Time

Naoya OTA[1*]

Abstract:

In "The Whitsun Weddings", Philip Larkin describes the scenery and people he saw inside and outside of the train heading to London from Hull. The poet describes things as they are but dares not express his thoughts and ideas vociferously with some exceptions of allusive words.

Despite its superficial readability, this poem is intricate because three themes − isolation, marriage, and society − are mingling throughout. Until today, critics have mainly paid attention to juxtapositions, such as a local city (Hull)/ the Capital (London), dark / light, nature / industrialization, the single / the married, seen in this poem and tried to clarify that the main theme of this piece is marriage. But they have not addressed the meaning of the last four lines of the poem.

This paper offers another way of reading regarding 'Time (which urges transfiguration of people and society)' as the main theme of this poem, and removes ambiguity of the final lines. This way of reading must be affirmed if we consider the fact that this poem was written based on Larkins journeys made in the middle of the 1950's, not long after the end of the Second World War.

Key Words: England, society, transfiguration, time

[1] Kochi Gakuen Universitry, Department of Nutrition, *Email: noota@kochi-gc.ac.jp